

古湊川流路の再検討

山下 史朗

はじめに

湊川は、古代から続く兵庫の町と幕末の開港以降急速に発展した神戸との境を流れていた川であった。湊川の上流は石井川と天王川とが菊水町一丁目の菊水橋上手で合流して南流した後、東山町一丁目の洗心橋付近で南東方向に向きを変え、湊川公園、新開地を通じて現在の川崎重工業の中央を抜けて神戸港に流れこんでいた。六甲山地南麓の主要な河川は、扇状地を形成し天井川化していることが知られているが、湊川の場合は扇状地形から突出していることが特筆され、その河床が二階建て住宅の屋根より高い典型的な天井川であった。

一八六八年の兵庫（神戸）開港以降、神戸地域の発展や市街地拡大が大きく進む中、湊川は明治初期に東海道線神戸駅と山陽鉄道（現JR山陽本線）兵庫駅との間が断絶していたことに代表されるように東西交通の障害とされていたうえに、神戸港への土砂の流入が問題となっていた。それに加え、慶応二年（一八六六）、明治七年（一八七四）と度重なる水害にみまわれていたため湊川の付替えが検討されたが、その工事が膨大なものとなることから実現しないでした。ところが明治二九年（一

八九六）に大水害が発生したことから、湊川の付替えを早急に進めることとなった。明治三〇年の計画着手当初は東山町から西に会下山の南麓の松本通付近を通す計画だったが、近隣住民から洪水被害を不安視されたことで計画変更され、会下山の地下をトンネルで通し、長田区の荻藻川に流すという壮大な工事が行われることとなり、民間会社により日本最初の河川トンネル「湊川隧道」が建設された。結果として残された旧湊川流路の南部では堤防が取り除かれ、明治三八年（一九〇五）に大正・昭和初期では神戸随一の繁華街新開地が誕生したのである。



図1 明治時代の湊川（琴平橋付近 註(1)文献）

こうして付け替えられた湊川は新湊川となり、かつての湊川は旧湊川と呼ばれるようになった。この著しく天井川化し人工的とも見られた湊川に対して、かつて古湊川が存在しており、いつのころから本来の流路から人為的に曲げられ付け替えられたとの解釈が長らく通説となつてくる。このように考えられるようになった経緯と、その真偽について検証してみたい。

1 これまでの古湊川説

湊川を付け替えたという説の最も古い例としては『福原鬢鑑』（延宝八年（一六八〇））がある。ここでは「昔は兵庫ヨリ西に有之由申傳、いつの比川筋替たるか、所の者年数おぼえず」と記述されており、昔は西に流れていたという伝承があるが、いつ付け替えたのかは地元の者でもわからないとされている⁽²⁾。また、『撰津名所図絵』（寛政八年（一七九六））では、「古は石井より会下山の麓を西へ流れ、兵庫の町の西より大和田濱にて海に入る。平相国兵庫築島せらるるの時、洪水の難を避けん為に、今の如く川違ありしなり」とされており、兵庫の町から大輪田の浜に至るといふ具体的なルートと、平清盛の時代に付替えられたとの説が加えられている⁽³⁾。このように、江戸時代には湊川はかつて兵庫の町の西側を流れていたとの伝承が定着していることがわかる。

明治時代の『西撰大観』（明治四四年（一九一））では、明治に出された地名辞書が『東鑑』『源平盛衰記』『平家物語』を引用し、「当時既に今の如く湊川の東流たるを証すべし。」として、平清盛の時代にはすでに湊川（旧湊川）流路を流れていたとしていることに対し、『方丈記』

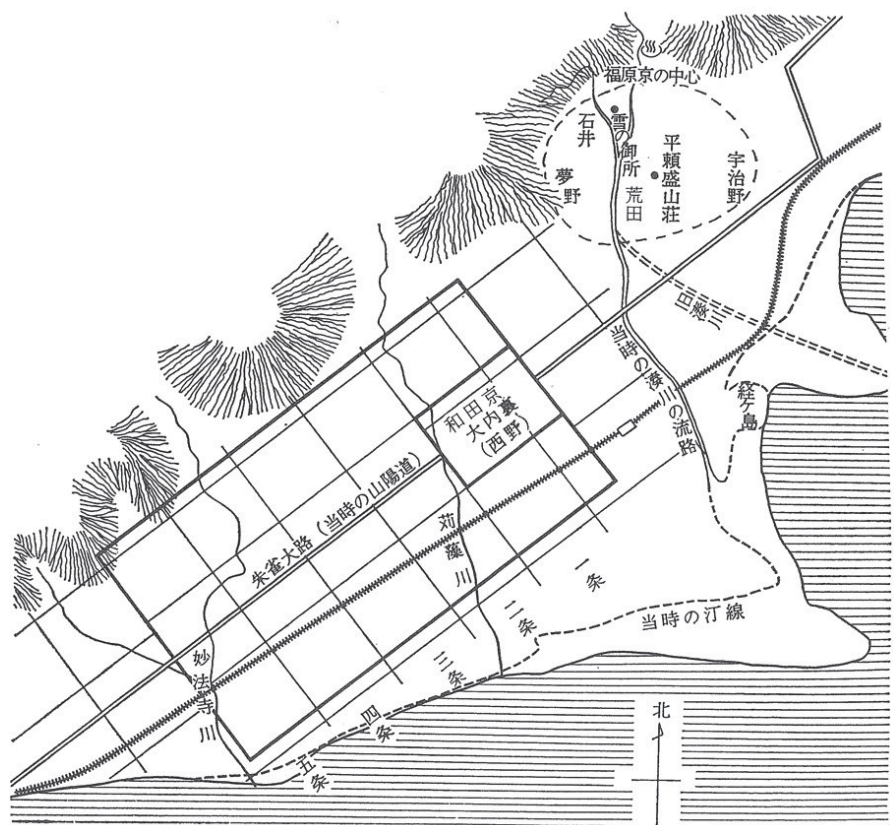


図2 通説となっている古湊川流路推定図（落合重信註8文献より転載）

『山塊記』などを引用し「湊川の東流は寿永（一一八二～一一八三）前にあらざること。」として、清盛以前にはありえず池田恒興の兵庫築城に伴って付け替えられたとしている⁽⁴⁾。

大正時代になると、喜田貞吉氏による『神戸市史』（一九二二）では、湊川の名が和野（兵庫）の湊にそぐ川であるとしながら、問題はその流路が何時の頃に東に転じて旧湊川をなすに至ったかについては、源平

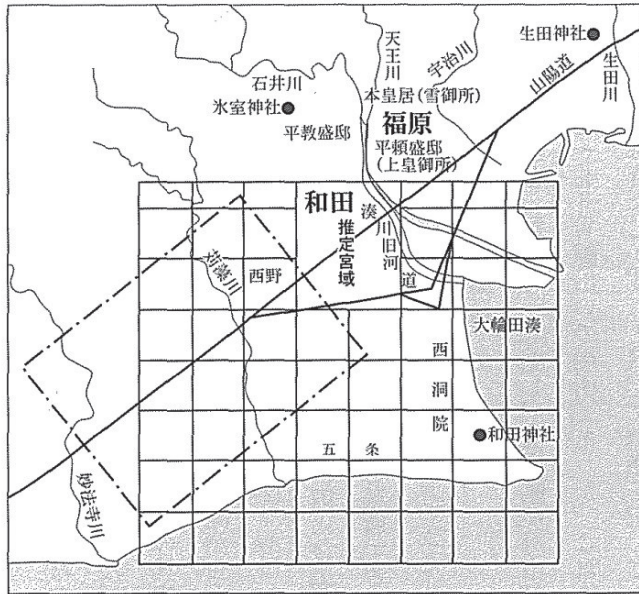


図3 新修神戸市史歴史編Ⅱ古代・中世より転載

合戦以後のものであることはほとんど疑う余地がないとし、それを知るべき史料はないのが遺憾としながらも、西撰大観の源平合戦以後に東に転じたという説に従うべきであるとしている⁽⁵⁾。

昭和時代に入ると、『神戸市水害誌』(一九三九)には、「流路の問題は川崎の出洲の土量が果たして幾年間に造成せられたるものが解決せざれば、その年代は不明に終るであろう。今より二六〇年前の市民が凡そ一〇〇年を経ざる池田氏の付替えに対し付替えの年次を知らずと伝えたに徴すると、或は池田氏以前の付替事業にあらざるなきか、研究に値する。」とあり、池田氏以前の付け替えの可能性を述べている⁽⁶⁾。

昭和後期になると、落合重信氏は、応保二年卯月吉日銘撰津国八部郡

奥平野条里図(写)

の検討から、奈良時代に古湊川の流れていた場所を特定し、現地に残る上沢、下沢、永沢、柳原、三川口の地名から、古湊川の流路を推定している⁽⁷⁾。一九七六年に刊行された兵庫県史第二巻で、石田善人氏は、湊川の付け替えについては触れていないものの、

挿図には福原京時代に古湊川が描かれている⁽⁸⁾。これは落合氏の説を引用したものであろう。

平成時代になると、新修神戸市史では、元木泰雄氏は湊川旧河道として永沢町〜七宮町あたりを推定しているが⁽⁹⁾、これは足利建亮氏の推定復元説を踏襲したものである⁽¹⁰⁾。田辺眞人氏は、古湊川流路について落合氏の説を踏襲しながら、経ヶ島(経ノ島)を人工島とする考えから完全な島として復元している^(11・12)。

さらに令和になると、中山久憲氏は、古湊川の流れをつけ替えたのは誰かとして、室町・戦国時代に兵庫城と兵庫津の城下町の建設の障害になる古湊川を旧湊川の方へ付け替えたとする神木哲男氏・崎山昌廣氏の説⁽¹³⁾や、それを説明する資料がなくそれ以前の時期ではないかとする落合重信氏の説⁽¹⁴⁾を引用しながら、本格的には池田信輝が付け替えたのではなく、それ以前に歴史上の主人公とはなかった兵庫津を支えた商人・町人の力で、バイパスとしての流れの確保として付け替えていたと考えるのが妥当ではないかとしている⁽¹⁵⁾。

このように、かつての湊川は西流していた古湊川が旧湊川に付替えられたという大前提に立っており、その付替え時期が平安時代末期の清盛の築島建設時か、もしくは戦国時代末期の池田氏の兵庫城築城時か、あるいはその中間かという所説が論争となってきた。いずれも、そもその大前提として古湊川が西流していたという説に立っているが、その根拠が科学的に示されたものではなく、江戸時代から続く伝承でしかないように思われる。

2 地形・地質学からみた流路の検討

(1) 地質学からの検討

それでは本格的に科学的に検討された研究成果をみてみよう。

増田富士雄氏は、二〇一四年の神戸市須磨区古川町遺跡発掘調査現場及び二〇一七年の兵庫津遺跡第六二次調査の地層観察や周辺のボーリングデータを解析されている。その結果図4のとおり明石海峡から伸びた巨大な砂嘴を復元され、その形成時期は縄文時代中期ころと推定されている⁽¹⁶⁾。

これは縄文時代前期ころに海拔3m前後にまで達していた縄文海進後の海退に伴い、約四五〇〇年から四〇〇〇年前の縄文時代中期から後期ころまでには新たな海浜堤が形成されていたことを裏付けるものである。また増田氏の調査によると、兵庫津遺跡第六二次調査現場では東側と北側に向けて砂礫が堆積している状況が観察されていることから、明石海峡方面からの海流により砂嘴の先端部分が形成されたことが指摘されている⁽¹⁷⁾。

さらに縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて海退がピークに達していたことも明らかにされており、現在の海水準よりも一〜二m低かったこともわかっているため、現在の埋め立て地を除いた須磨から和田岬にかけての明治時代初めころの海岸線がすでに三千年から二千数百年前ころには形成されていたと考えてよいだろう。あとは湊川が運んだ砂礫がどのように海浜を形成していったのかということが課題となる。

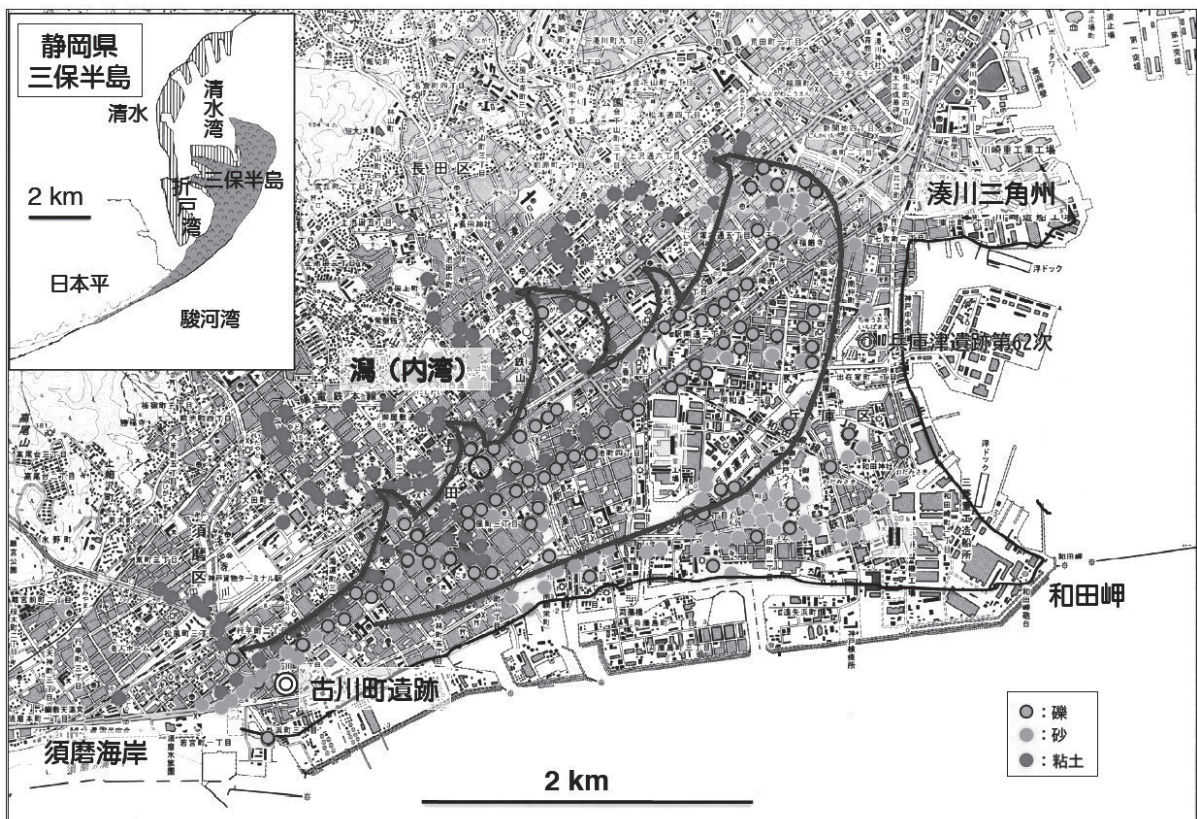


図4 和田岬地域の砂嘴と潟の堆積物の分布（増田富士雄他註16文献所収図に加算、一部色調改変）

（2）新湊川流域変遷史編集委員会での検討

兵庫県神戸県民局（現神戸県民センター）が新湊川整備に合わせて開催した新湊川流域変遷史編集委員会では、専門家が集い「古湊川の謎」として流路について議論されている⁽¹⁸⁾。この記録によると、応用地質学の末廣匡基氏は、地盤データベースのデータの分析から、旧湊川の下層には厚さ一〇mの貝殻混じりの礫質層が連続しており、旧湊川そのものの堆積層であると推測されている。さらに古湊川は固定された流路とは考えづらく、決まった流路はもたず荒れ放題であった可能性も考えなければならぬとしている。

また土木工学の佐俣千載氏は、五〇〇〇から四〇〇〇年前ころから和田岬や古湊川の堆積が始まり、旧湊川に流れが変わったのは湊川崎の堆積土量から二〇〇〇年以上前で、西側の湿地帯を迂回していたとは考えづらい。古湊川も旧湊川も洪水が流れていた川であり、常時の水は本線から伏流して泉となって湧き出し、数本の小河川の流れとなって、河口ではそれぞれ入江を作っていたと推定されている。

地理・地形学の高橋学氏は、古湊川という概念について、二万年の水河時代から六段階が想定されるが、湊川の合戦（一の谷の戦いか）のころには旧湊川の位置であり、天井川化したのも一世紀ころとされている。また地形観察によりそれ以前の河道は周辺では確認できないとしている。

これに対して田辺眞人氏は、歴史学の立場からは、湊川という名称自体が港に流れ込んでいる川から名付けられたものであって、三川口などの地名が残っていることから古湊川が大輪田泊に流れ込んでいたとされている。また、幾筋もの川筋が、大雨でも降らない限り流れない川で、

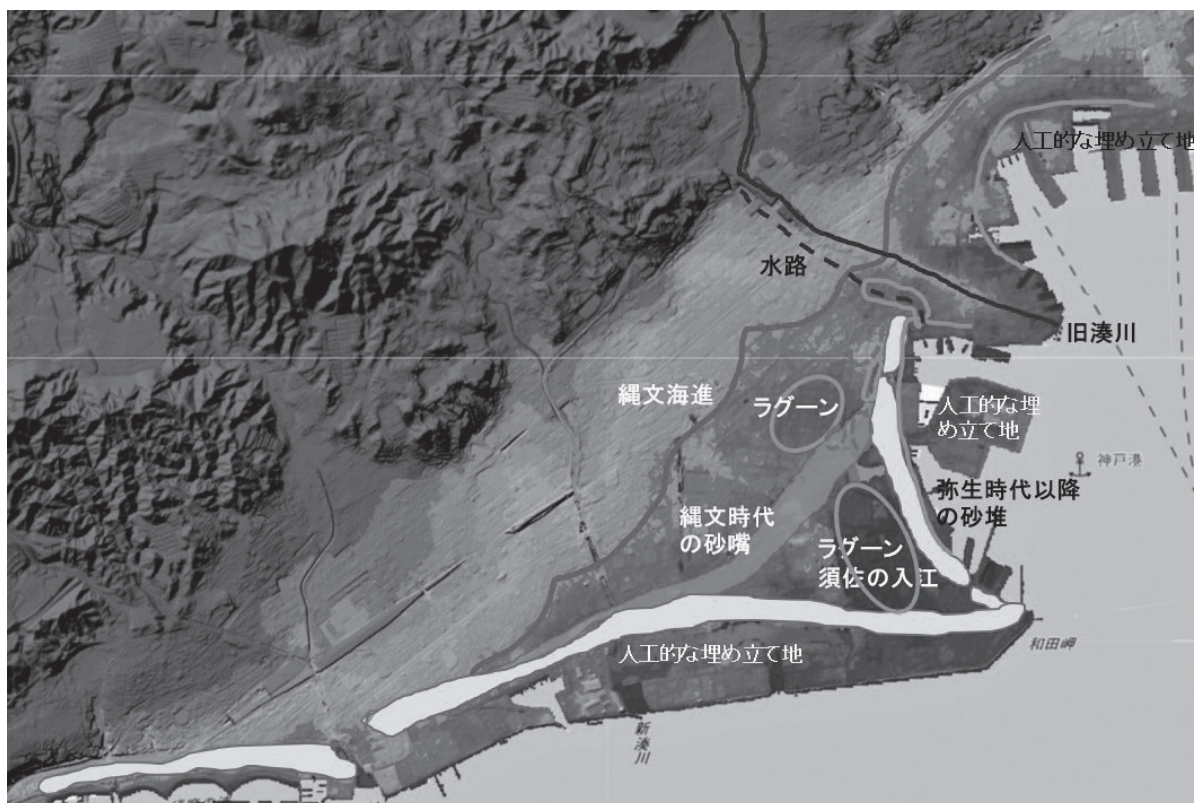


図5 兵庫付近の地形分析図（地理院地図をもとに作成）

しかも河口が扇状地と三角州が入り混じったような川を湊川と名付けるものだろうかと思案をもたれた。

しかし地質学の竹村恵二氏は、古湊川の存在はほとんど考えなくてよいのではないかと、扇状地の河川に対して河床固定する以前には川の流れはないとし、三角州帯（扇状地の末端）の一番北側から湧水が川として流れることがあると解釈されている。

また地盤工学の沖村孝氏は、湊川は常時水を流す川ではなく、扇状地末端からの湧水あるいは伏流水である可能性が高く、氾濫原、あるいは湖岸湿地になるようなところを水が流れており、旧湊川は天井川であり、天井川ができあがる過程においてはどこかで河床固定が行われない限りここまで発達しないと結論付けている。

(3) 地形図からの分析

図4は地理院地図をもとに筆者が作成した標高色分け図である。須磨から和田岬にかけては砂洲が発達しているが、これは増田氏の指摘する縄文時代に砂嘴が形成されたのちの海退期に形成された砂嘴で、海退のピークは縄文時代晩期から弥生時代前期ころと考えられており、砂礫の供給源は明石海峡方面からのものであると考えられる。この時期から明治初期までの海岸線にはほとんど変化はないと考えられる。

一方で旧湊川から和田岬にかけての海岸にも長大な砂洲が形成されている。これは湊川を砂礫の供給源としたものと考えられる。江戸前期から残る絵図から見ると江戸時代を通じて浜の海岸線が海側に拡がっていることがわかるが、これも湊川からの絶え間ない砂礫の供給が原因である。また、良く観察すると、この砂堆列は背後にももう一列が観察でき、



図6 元禄期の絵図に見える流路（神戸市立博物館寄託「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」部分）

その間には提間低地が存在しており、これが船入江を形成している。これは海退期の名残であるが、外列砂堆の背後にはこのほかにも佐比江や須佐の入江があるが、船入江は河川の河口とは関係していないものである。

近年の研究では、中世以前の大輪田泊は須佐の入江だったとの説が有力になっているが⁽¹⁹⁾、平清盛の整備した大輪田泊については、これとは別に整備したもので、鎌倉時代以降続く船入江がそれであったと考えてよいだろう。

古湊川の推定流路だが、これまで通説となっている上沢→下沢→永沢までは流路としての可能性がなくはない。しかし三河口→柳原については土地が高くなっており、こちらに川筋があったとは考えられない。本町付近の高まりについても縄文海退期の砂嘴の先端部の可能性が高く、

すでに七宮町と和田岬にかけては弥生前期以降に形成された砂洲が存在していることから、流路としては川池（松本通一丁目）と湊町と佐比江町に続く低地が想定できる。この流路は図6など江戸期を通じて絵図に描かれていることから存在は確かである。ただ、この流路が湊川の本流かといえそうとは考えられない。あくまでも湊川の本流は旧湊川であることは土砂の堆積量から考えて間違いないだろう。

ただ、なぜ天井川化したのかということになるのだが、周辺の開発が進んでくると、河道を固定化して堤防を強化し、洪水を防ぐ必要が生じてくる。時代背景を考慮すると、七世紀末の律令制の開始期に古代山陽道が敷設され、その基準線に合わせて条里地割が施工されており、旧湊川の両岸で明瞭に地割が残されていることから考えると、旧湊川の流路自体は遅くとも奈良時代には固定化されていたと考えてよいだろう。この本流とは別に扇状地地形の脇や末端から流れ出した地下水が川筋となつて流れるのは当然である。こちらを古湊川の本流と考えるならば、大量の土砂が供給され低地とはならない。

このことを示す史料として、福原京に関連した中山忠親の山槐記がある。治承四年八月一三日の記事によると、輪田原周辺を巡覧し小松原から泊に向かい高瀬舟に乗船して着いたところで堤の上に登り、南の海方面の大輪田泊を眺めたと記録されている⁽²⁰⁾。このことから、大輪田泊からは高瀬舟で福原方面に向かったこと、堤があったことがわかる。おそらく水路を使って高瀬舟で福原方面に向かったことや、旧湊川が堤を持ち天井川化していたことを示すものであろう。この水路は、天井川化し水のない旧湊川に対して、勾配もゆるく水量もそこそあって高瀬舟で上るには十分であつただろう。

律令時代から物資を運搬するためにこのような水路を運河状に改修することは一般的であつたし、貴族邸宅の京から福原京への移転に際しても建築や瓦を大量に運んでいることから、水のほとんどない旧湊川本流ではなく、これらの水路が福原の居館群と大輪田泊とを結ぶ重要な物流水路として利用されたのではないだろうか。

3 結論

扇状地地形では堆積土砂は扇形、放射状に堆積する。また通常はほとんど水の流れない本流路だけではなく、地下水は土砂とは別に末端から染み出しあちこちに流路をつくる。旧湊川は、東山町付近の断層を境に三角州帯に分類されているが、これは縄文海進後の海退に伴う地形形成と考えられるため、弥生時代以降にはゆるやかな扇状地地形を形成している。さらに中世初頭までに天井川化した本流とは別に幾筋もの川筋があつたことが推定できよう。したがって天井川化した本流とは別に、川池を起点とした上沢、下沢、永沢の地名に残る古湊川とされている川筋は、土砂をあまり運ばないが水量は多い支流であつたと推定できるのではないだろうか。したがって、これまで推定されている古湊川は旧湊川の支流であつたと結論づけたい。

- (1) 註 荒尾親成編『ふるさとの思い出写真集 明治 大正 昭和 神戸』一九七九 国書刊行会
- (2) 『福原鬢鑑』一六八〇
- (3) 『撰津名所図絵』一七九六
- (4) 『西撰大観』一九二一 明輝社
- (5) 『神戸市史 別録二』一九二二 神戸市
- (6) 『神戸市水害誌』一九三九 神戸市
- (7) 落合重信『神戸の歴史通史編―古代から近代まで―』一九七五 後藤書店
- (8) 石田善人『兵庫県史第二巻』一九七六 兵庫県
- (9) 元木泰雄『福原遷都と源平の争乱』『新修神戸市史 歴史編Ⅱ 古代・中世』二〇一〇
- (10) 足利健亮『福原と和田新京』『週刊朝日百科日本の歴史1・源氏と平家』一九八六
- (11) 田辺眞人、谷口義子『神戸の歴史ノート』二〇一八 神戸新聞総合出版センター
- (12) 田辺眞人『神戸かいわい 歴史を歩く』二〇二二 神戸新聞総合出版センター
- (13) 神木哲男・崎山昌廣『みなと神戸の発展の歴史的背景と今後の課題』一九九六
- (14) 落合重信註8文献
- (15) 中山久憲「みなと神戸の発展の歴史的背景と今後の課題―市民工学的視点からの試論として―」『現代社会研究』第五号 二〇一九 神戸学院大学現代社会学会
- (16) 増田富士雄、佐藤喜英、櫻井皆生、伊藤有加「神戸市古川町遺跡にみられる砂礫浜海岸の堆積物とその古地形上の位置」『古川町遺跡第二次発掘調査報告書』二〇一四 神戸市教育委員会文化財課
- (17) 増田富士雄、廣木義久「神戸市兵庫津遺跡でみられる砂嘴堆積層」『兵庫津遺跡第六二次発掘調査報告書』二〇一七 神戸市教育委員会文化財課
- (18) 「古湊川の謎」『歴史が語る湊川―新湊川流域変遷史』二〇〇二 新湊川流域史編集委員会
- (19) 大村拓生「大輪田・福原と兵庫津」『兵庫津の総合的研究―兵庫津研究の最新成果』二〇〇八 大手前大学史学研究所
- (20) 中山忠親『山槐記』治承四年八月一三日
(兵庫県企画部地域振興課歴史資源活用専門官)